

海外の畜産物の需給動向

牛肉

米国

牛肉輸出量が拡大、10月としては過去最高を記録

肥育牛価格、前年同月比16.3%高

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年11月のフィードロット導入頭数は192万5000頭（前年同月比2.1%減）とわずかに減少し、出荷頭数は189万1000頭（同1.2%増）とわずかに増加した。この結果、22年12月1日時点のフィードロット飼養頭数は1145万4000頭（同4.4%減）と3カ月連続で前年同月を下回るなど、下げ幅が拡大した（図1）。飼養頭数が減少し、肥育牛の供給量が限られる一方、需要は堅調を維持しており、22年11月の肥育牛価格は100ポンド当たり156.00米ドル（1キログラム当たり460円：1米ドル＝133.70円^{（注）}、前年同月比16.3%高）と高値で推移している（図2）。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

10月の牛肉輸入量、前年同月比11.0%減

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年10月の牛肉輸入量は11万8378トン（前年同月比11.0%減）とかなり大きく減少した（表1）。輸入先別に見ると、低関税輸入枠（6万4805トン）のほとんどを自国のみで消化したブラジルは大幅な減少

図1 フィードロット飼養頭数の推移

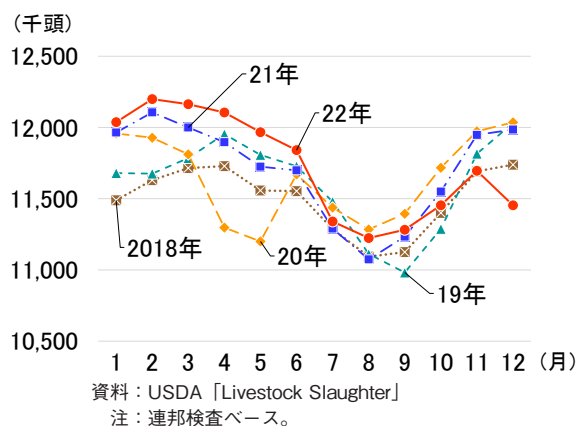
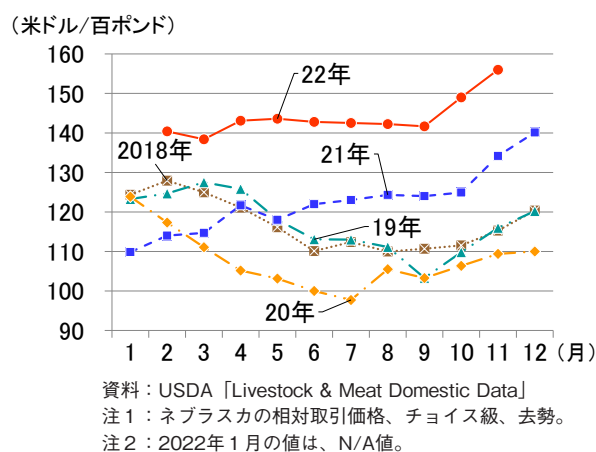


図2 肥育牛価格の推移



となっている。また、豪州やニュージーランドは、干ばつや労働者不足による生産量の低迷や物流の混乱がある中で、牛肉需要が旺盛なアジア向け輸出の増加により米国向けは減少している。22年1～10月の累計では、131万6555トン（同4.5%増）とやや増加

表1 輸入先別牛肉輸入量の推移

(単位：トン)

	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	シェア	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
カナダ	40,597	41,781	2.9%	35.3%	364,852	0.8%
メキシコ	27,294	25,570	▲6.3%	21.6%	284,207	12.3%
豪州	19,151	17,930	▲6.4%	15.1%	149,055	▲4.0%
NZ	13,534	9,262	▲31.6%	7.8%	162,163	▲20.5%
ブラジル	17,122	9,209	▲46.2%	7.8%	197,928	57.1%
その他	15,271	14,626	▲4.2%	12.4%	143,651	▲10.0%
合計	132,968	118,378	▲11.0%	100.0%	1,316,555	4.5%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」

注：枝肉重量ベース。

しており、米国内での旺盛な需要や生産能力の向上などを背景に、輸入量の半分を占める輸入先上位2カ国のカナダ、メキシコが前年同期を上回っている。

10月の牛肉輸出量、前年同月比9.7%増

USDAによると、2022年10月の牛肉輸出量は13万6569トン（前年同月比9.7%増）とかなりの程度増加し、10月としては過去最高を記録した（表2）。輸出先別に見ると、

韓国、中国、フィリピン向けが前年同月を大幅に上回り、日本向けは2万7747トン（同0.2%増）と前年同月並みとなった。旺盛な需要を背景に、引き続きアジア向け輸出が好調で、全輸出量の7割以上を同地域が占めている。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の急拡大が続く中国向けの増加についてUSDAは、eコマース（電子商取引）の普及などによる中流層からの家庭内需要の増加が一因と分析している。

表2 輸出先別牛肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	シェア	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
韓国	25,563	30,038	17.5%	22.0%	305,897	2.6%
中国	21,808	27,945	28.1%	20.5%	252,077	25.9%
日本	27,688	27,747	0.2%	20.3%	310,006	▲0.8%
メキシコ	11,571	12,063	4.3%	8.8%	103,172	▲12.3%
カナダ	9,439	10,761	14.0%	7.9%	103,411	1.0%
台湾	6,126	6,143	0.3%	4.5%	78,617	9.2%
香港	5,686	3,883	▲31.7%	2.8%	30,295	▲39.1%
フィリピン	970	3,635	274.7%	2.7%	23,766	64.2%
その他	15,664	14,356	▲8.4%	10.5%	150,409	20.2%
合計	124,514	136,569	9.7%	100.0%	1,357,651	5.1%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」

注：枝肉重量ベース。

(調査情報部 伊藤 瑞基)

豪州

牛肉輸出量低迷も、今後は輸出増に向けた好機との見通し

肉牛取引価格は上昇傾向に反転

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、2022年11月半ばごろから急激な下落傾向にあったものの、同年12月7日時点の1キログラム当たり855豪セント（783円：1豪ドル＝91.57円^{（注）}）を底に上昇傾向に転じている（図）。22年最後の取引となる12月15日は、同901豪セント（825円）と、21年末の終値である1160豪セント（1062円）からは22.3%低い水準となったが、過去5カ年平均からは3割程度高い水準となっている。

現地報道によると、12月上旬までの下落傾向は、牧草が潤沢にあるものの、フィードロットや食肉処理施設における収益性の低さを背景とした需要減によるものであるとしている。特にフィードロットでは、穀物価格の高騰や長雨による牛の肥育不良に加え、高値

にある肉牛価格により入手が困難なことも要因に挙げられている。また、クリスマスの需要期を前に、価格は年末に上昇傾向に反転し、年明けにはさらに上昇する見込みとしている。一方で、生産コストの上昇やインフレ下での消費動向、世界的な牛肉輸出市場の^{すうせい}趨勢などが、肉牛購買者の不安材料となっているとしている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

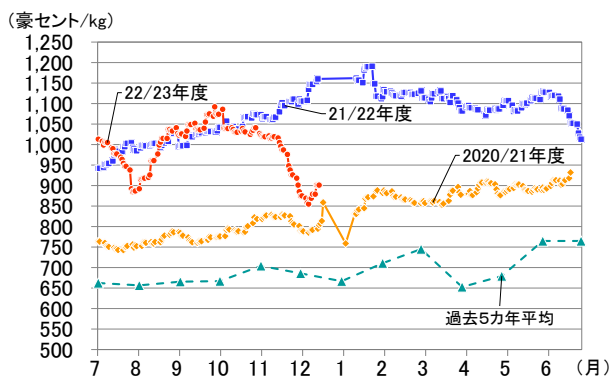
牛肉輸出量、日本向けは減少も米国向けが増加

豪州農林水産省（DAFF）によると、2022年11月の牛肉輸出量は6万9697トン（前年同月比7.9%減）とかなりの程度減少した（表）。

輸出先別に見ると、日本向けは1万7267トン（同14.7%減）とかなり大きく、韓国向けも1万3302トン（同27.1%減）と大幅に減少しているが、米国向けは9383トン（同13.7%増）、東南アジア向けは7885トン（同16.1%増）と増加している。

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）によると、今後少なくとも1年間は、豪州産牛肉輸出にとっては好機としており、その理由として、米国での干ばつによる牛群^{どうた}淘汰が進むことで飼養頭数が低水準となり、将来的には牛肉生産量が大幅に減少する見込みであることを挙げている。また、豪州はインドネシア、シンガポール、タイ、ベトナムなどの東南アジア諸国に、年間約27億豪ドル（2472億円）の赤身肉を輸出しているが、当該地域の今後の富裕層拡大により、主要たんぱく源が、魚

図 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

や鶏肉から赤身肉へ移行することが見込まれるほか、観光業などではCOVID-19からの回

復により、赤身肉需要が高まっていくとしている。

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2021年 11月	22年 11月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～11月)	前年同期比 (増減率)
日本	20,239	17,267	▲ 14.7%	197,876	▲ 8.8%
中国	13,157	13,487	2.5%	145,136	7.9%
韓国	18,238	13,302	▲ 27.1%	144,599	▲ 3.5%
米国	8,254	9,383	13.7%	117,290	▲ 9.6%
東南アジア	6,790	7,885	16.1%	83,764	▲ 5.4%
中東	2,472	2,138	▲ 13.5%	25,980	▲ 5.5%
E U	907	502	▲ 44.6%	6,853	▲ 8.1%
その他	5,656	5,732	1.4%	56,976	1.9%
輸出量合計	75,712	69,697	▲ 7.9%	778,475	▲ 4.0%

資料：DAFF

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル・ハイマ）の合計。

(調査情報部 国際調査グループ)

ブラジル

牛肉生産量は22、23年と2年連続で増加を予測

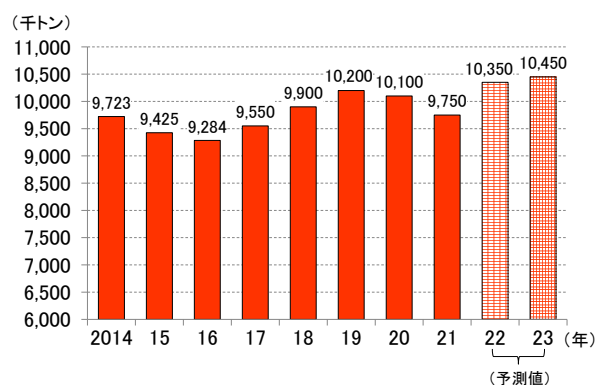
22年の牛肉生産量、前年比6.2%増の見込み

米国農務省海外農業局（USDA/FAS）によると、2022年のブラジルの牛肉生産量は1035万トン（前年比6.2%増）とかなりの程度増加し、3年ぶりに増加に転じると見込まれている（図1）。また、23年は1045万トン（同1.0%増）と2年連続での増加が予測されている。これは、同国における牛と畜対象頭数が増加する中で、22年の牛肉国際価格が高水準で推移していることや、これを受けて生産者が飼育期間を延長し、平均と畜重量が増加していることなどが要因とみられる。

同国では、18～19年にかけて旺盛な牛

肉需要に対応するため多くの雌牛がと畜に回されたが、その後、生産者が牛を保留し牛群再構築の方向に転換した。この結果、20～21年のと畜対象頭数は減少していた。

図1 牛肉生産量の推移



資料：USDA

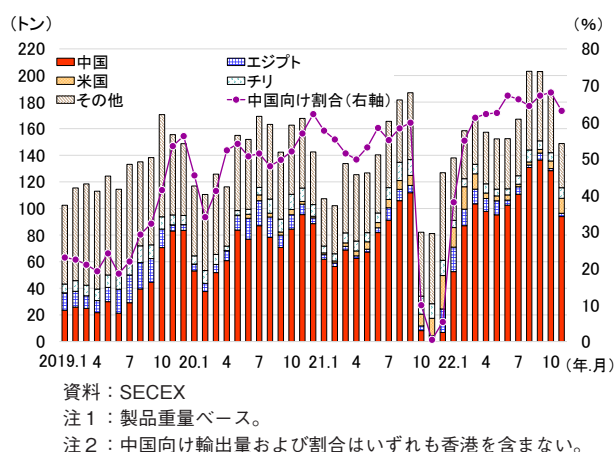
注1：枝肉重量ベース。

注2：2022、23年は予測値。

22年1～11月牛肉輸出量、前年同期比28.3%増

ブラジル経済省貿易事務局（SECEX）によると、2022年1～11月の牛肉輸出量は183万8664トン（前年同期比28.3%増）と前年同期を大幅に上回った（図2）。これは、21年9月にブラジルで非定型BSEに感染した個体が確認されたことで主要な輸出先である中国などにより講じられた輸出制限措置のため、同年10～12月の輸出量が大きく落ち込んだ後、制限が解除され輸出が回復したためである。

図2 牛肉輸出量および中国向け輸出割合の推移



22年1～11月の牛肉輸出量を輸出先別に見ると、中国向けは113万9274トン（同59.0%増）と大幅に増加し、輸出量全体の62%を占めた。同国向けは、輸出制限措置がとられた21年12月15日までの約3カ月間、輸出量が落ち込んだが、22年2月以降は前年同月を上回る輸出量となった。エジプト向けは8万2509トン（同74.0%増）と大幅に増加し、チリや米国を抜いて中国に次ぐ輸出先となった。同国向けは18年以降、価

格上昇などにより減少傾向で推移していたが、ハラル牛肉需要の高まりなどを背景に再び増加している。また、20年2月に輸出が再開された米国向けは7万8810トン（同29.8%増）と大幅に増加した。

22年肥育牛価格、需給緩和に伴い下落傾向で推移

サンパウロ大学農学部応用経済研究所（CEPEA）によると、2022年の肥育牛価格は、21年9月の牛肉輸出制限の影響による大幅な下落後、海外からの堅調な需要、また、飼料費など生産コストの上昇やインフレの進行などを背景に急速に上昇し、22年3月には1キログラム当たり23リアル（589円：1リアル＝25.62円^{（注）}）台に達した（図3）。しかし、その後は、と畜頭数や平均と畜重量の増加により牛肉需給が緩和したことで下落傾向に転じ、22年11月には同18リアル（461円）程度まで下落した。22年12月22日時点の価格は、同19.81リアル（508円）となっている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」2022年12月末Selling相場。

図3 肥育牛価格の推移



（調査情報部 井田 俊二）

豚 肉

米 国

22年10月の肥育豚価格、前年同月比で大幅に上昇

繁殖豚飼養頭数、前年同月比0.5%増

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年12月1日時点の豚飼養頭数は7311万9000頭（前年同月比1.8%減）とわずかに減少した（表1）。内訳を見ると、肥育豚は6696万6000頭（同2.0%減）とわずかに減少したが、繁殖豚は615万4000頭（同0.5%増）とわずかに増加した。現地報道によると、肥育豚価格が堅調に推移する中、生産者の飼料コスト高騰に対する懸念が和らいだことで、繁殖豚飼養頭数の増加にもつながったとされている。また、9～11月期の分娩母豚頭数および産子数は減少したものの、1頭当たりの産子数は11.22頭と前年並みとなった。

肥育豚価格は供給減により大幅に上昇

2022年11月の豚肉生産量は、同月のと畜頭数減少などにより106万6000トン（前年同月比2.4%減）とわずかに減少した。これを受け、肥育豚価格は100ポンド当たり63.7米ドル（1キログラム当たり188円^{（注）}：1米ドル＝133.70円、同16.9%高）と前年同月比では大幅に上昇した（図）。一方、22年11月の豚肉卸売価格は、100ポンド当たり93.4米ドル（1キログラム当たり275円、同2.7%高）とやや上昇した。USDAによると、高病原性鳥インフルエンザの影響により七面鳥の供給量が減少する中、代替的に豚モモ肉の需要が増加したことが、豚の供給量減少と併せて卸売価格を下支えしたとされている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

表1 豚飼養頭数の推移

（単位：千頭）

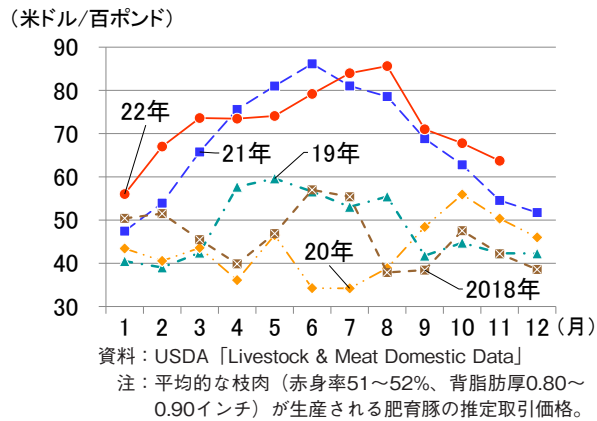
	2019年	20年	21年	22年	前年比 （増減率）
総飼養頭数（12月1日時点）	78,228	77,312	74,446	73,119	▲ 1.8%
繁殖豚	6,471	6,176	6,125	6,154	0.5%
肥育豚	71,757	71,136	68,321	66,966	▲ 2.0%
50ポンド（23キログラム）未満	22,048	21,989	21,594	21,153	▲ 2.0%
50～119ポンド （23～53キログラム）	20,636	19,680	19,005	18,620	▲ 2.0%
120～179ポンド （54～81キログラム）	15,256	15,791	14,374	14,095	▲ 1.9%
180ポンド（82キログラム）以上	13,816	13,675	13,348	13,098	▲ 1.9%
分娩母豚頭数（9～11月）	3,197	3,165	3,049	3,004	▲ 1.5%
産子数（9～11月）	35,459	34,987	34,123	33,691	▲ 1.3%
1腹当たり産子数（9～11月）（頭）	11.09	11.05	11.19	11.22	0.3%

資料：USDA「Hogs and Pigs」

注1：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

注2：産子数には事故などで死亡した子豚を含まない。

図 肥育豚価格の推移



22年10月の豚肉輸出量、アジア市場向けが大幅に増加

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年10月の豚肉輸出量は24万4800トン（前年同月比0.1%増）と前年並みで推移した。一方、22年1～10月の累計の豚肉輸出量は235万7900トン（前年同期比

12.1%減）とかなり大きく減少した（表2）。

10月の輸出量を主要輸出先別に見ると、中国・香港向けは中国国内の豚肉価格が高騰していた中で2万8100トン（前年同月比21.2%増）、韓国向けは1万7700トン（同30.1%増）といずれも大幅に増加した。一方、メキシコ向けは9万1900トン（同0.5%減）、日本向けは円安の影響もあり3万8600トン（同1.7%減）とわずかに減少した。

こうした状況について米国食肉輸出連合会（USMEF）のホルストロム会長は、「中国への輸出増に加え、輸出先の多様化も効果を上げている。また、食肉処理場における労働状況の改善も出荷増に貢献した」と、輸出回復の要因について語った。一方USDAは、米ドル高や豚肉価格の高止まり、他の輸出国との競合が輸出の足かせとなる可能性が高いとし、22年第4四半期の輸出量見込みを3万4000トン引き下げ、76万トンとした。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移

(単位：千トン)

	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	シェア	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
メキシコ	92.4	91.9	▲0.5%	37.6%	865.3	16.0%
日本	39.3	38.6	▲1.7%	15.8%	418.7	▲10.0%
中国・香港	23.2	28.1	21.2%	11.5%	230.5	▲53.4%
カナダ	21.7	20.7	▲4.6%	8.4%	189.8	▲12.2%
韓国	13.6	17.7	30.1%	7.2%	202.6	5.1%
コロンビア	15.3	10.2	▲33.0%	4.2%	111.1	4.3%
ドミニカ共和国	6.7	9.6	44.1%	3.9%	87.4	38.5%
その他	32.5	27.9	▲13.9%	11.4%	252.4	▲36.5%
合計	244.6	244.8	0.1%	100.0%	2,357.9	▲12.1%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

(調査情報部 小林 大祐)

23年の豚肉生産量は前年比4.6%増の見通し

豚肉生産量は引き続き増加と予測

米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は9月6日、2023年のメキシコの豚肉需給見通しを発表した。これによると、23年の豚肉生産量は、豚の飼養管理技術の向上による離乳子豚頭数の増加などにより160万5000トン（前年比4.6%増）と、やや増加が見込まれている（表1）。また、国内外の旺盛な需要により、同年の輸出量は33万トン（同

10.0%増）とかなりの程度増加し、消費量は255万トン（同2.6%増）とわずかに増加が見込まれている。特に、消費についてはCOVID-19まん延からの経済活動再開に伴い外食などでの需要が高まっているほか、インフレの影響により、バラエティミートや切り落としといった、手ごろな価格で購入できる部位が好まれるようになっている。こうした低価格部位を好む傾向は、少なくとも23年の前半まで続くと思われる。

表1 豚肉需給の推移

（単位：千頭、千トン、%）

	2020年	21年	22年	23年	前年比 (増減率)
と畜頭数	19,000	19,700	20,400	21,350	4.7%
供給量	2,396	2,639	2,785	2,880	3.4%
生産量	1,451	1,484	1,535	1,605	4.6%
輸入量	945	1,155	1,250	1,275	2.0%
輸出量	344	319	300	330	10.0%
消費量	2,052	2,320	2,485	2,550	2.6%

資料：USDA Gain Report

注1：2022、23年は予測値。

注2：枝肉重量ベース。

豚枝肉価格は前年を大幅に上回り推移

メキシコ国家情報市場統合システム（SNIIM）によると、2022年の生体豚価格は、6月以降、インフレや飼料価格の高騰を受けて高値で推移しており、11月は1キログラム当たり48.15ペソ（376円：1ペソ＝7.81円^{（注）}）と、前年同月比27.4%高となった（図1）。また、同月の豚枝肉価格についても、堅調な生体豚価格と需要を反映し同28.0%高の64.00ペソ（500円）と高水準で推移した（図2）。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

このような中でメキシコ政府は10月3日、インフレ抑制のため、食品輸入・流通関係企業との間で「インフレと食料不足に対応する協定（APECIC）」を締結した。協定には、輸入手続きの簡素化などにより食料品の輸入を促進し、食料品価格の抑制を図るといった内容が盛り込まれている。現地報道によると、11月前半の豚肉の小売価格は前年同期比9.2%高、鶏肉は同22.1%高など価格上昇が続いており、APECICによる畜産物価格の抑制効果は、限定的なものにとどまっているとされている。

図1 生体豚価格の推移

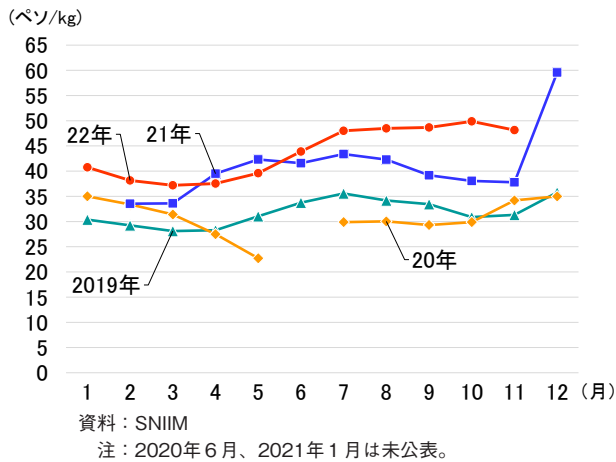
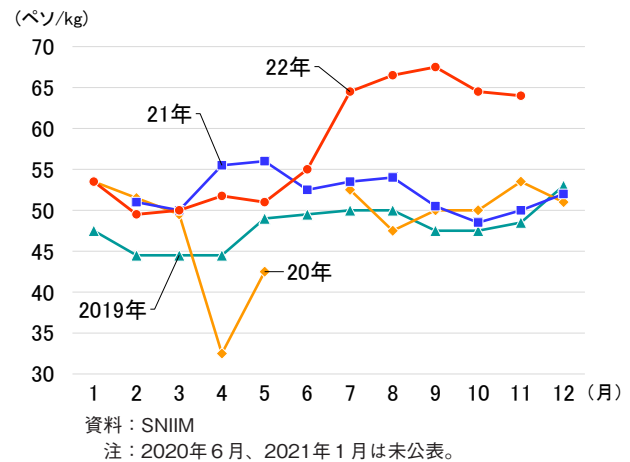


図2 豚枝肉価格の推移



1～9月の豚肉輸出量は減少傾向で推移

USDA/FASによると、2022年1～9月の輸出量は15万100トン（前年同期比14.6%減）と、かなり大きく減少している（表2）。

輸出先別に見ると、日本向けが10万8900トン（同12.8%増）、米国向けが2万7100

トン（同27.4%増）とそれぞれ大きく増加しているのに対し、中国向けは同国内のアフリカ豚熱の発生による生産減からの回復に伴い7900トン（同85.2%減）と前年同期の6分の1以下に減少し、全体の輸出量減少の要因となった。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年	21年 (1～9月)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)	シェア
日本	131.6	96.5	108.9	12.8%	72.6%
米国	33.2	21.3	27.1	27.4%	18.1%
中国	60.4	53.7	7.9	▲85.2%	5.3%
韓国	5.5	4.1	5.1	23.8%	3.4%
その他	0.3	0.25	1.0	294.8% (約3.9倍)	0.7%
合計	231.0	175.9	150.1	▲14.6%	100.0%

資料：「Global Trade Atlas」、メキシコ税関管理局、ITC（International Trade Center）

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード0203。

注3：2021年12月以降の数値については未公表のため、ITCのミラーデータを使用。

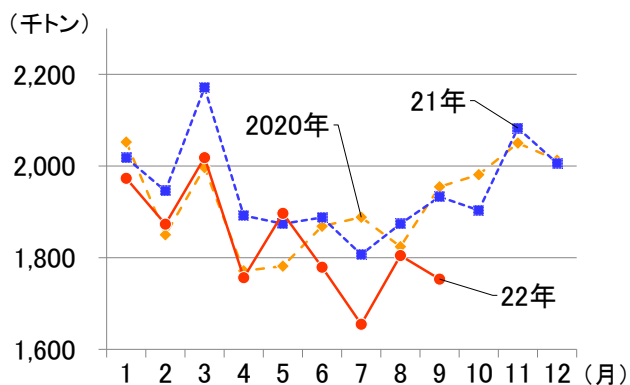
（調査情報部 小林 大祐）

豚肉生産量は減少、豚肉価格は低下の傾向

豚肉生産量は引き続き前年同月比減

欧州委員会によると、2022年9月の豚肉生産量(EU27カ国)は、175万3250トン(前年同月比9.3%減)とかなりの程度減少した(図1)。同月のと畜頭数は1909万頭(同8.7%減)と減少し、また、1頭当たり枝肉重量も91.8キログラム(同0.6%減)と減少した。

図1 豚肉生産量の推移



資料：欧州委員会

注1：枝肉重量ベース。

注2：直近月は速報値。

同月の生産量は、スペイン(同9.3%減)、ドイツ(同10.4%減)、フランス(同4.4%減)の上位3カ国をはじめすべての主要生産国で前年同月を下回った(表1)。欧州委員会の中期見通しによると、22年以降は中国の豚肉生産能力の回復をはじめとする輸出機会の減少やEU主要生産国におけるアフリカ豚熱の継続した発生、厳しい環境規制などの要因によりEUの豚肉生産量は減少傾向で推移すると見込んでいる。

卸売価格は2カ月連続で前月比安

欧州委員会によると、2022年11月の豚枝肉卸売価格(EU27カ国)は、前年同月比54.3%高の100キログラム当たり198.57ユーロ(2万8390円：1ユーロ=142.97円^(注))となった(図2)。同価格は2カ月連続で前月を下回ったものの、引き続き前年同月を大幅に上回っている。欧州委員会の見通しによると、同価格は22年の高騰後、中国向け輸

表1 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2021年 9月	22年 9月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)
スペイン	432	392	▲ 9.3%	3,756	▲ 1.4%
ドイツ	410	367	▲ 10.4%	3,361	▲ 9.8%
フランス	186	178	▲ 4.4%	1,615	▲ 2.1%
ポーランド	166	147	▲ 11.3%	1,334	▲ 8.8%
オランダ	143	142	▲ 1.2%	1,272	▲ 0.8%
イタリア	110	102	▲ 7.0%	948	▲ 4.7%
デンマーク	137	100	▲ 27.3%	1,218	▲ 5.8%
その他	349	326	▲ 6.5%	3,006	▲ 5.5%
合計	1,933	1,753	▲ 9.3%	16,510	▲ 5.1%

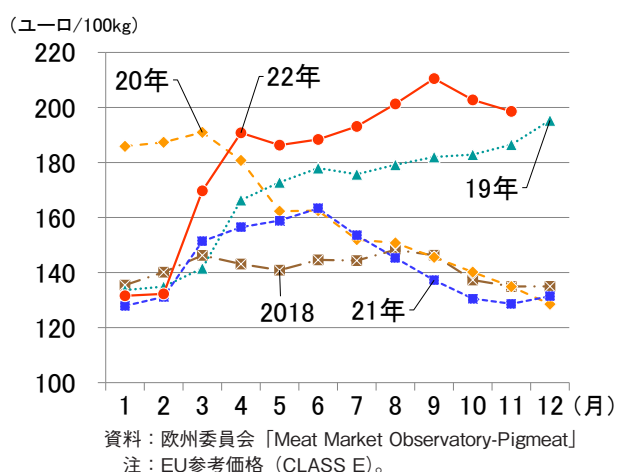
資料：欧州委員会「Eurostat」

注：枝肉重量ベース。

出量の継続した減少が見込まれることで25年までに徐々に下落し、その後、32年までは同150ユーロ（2万1446円）前後で推移すると予測されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

図2 豚枝肉卸売価格の推移



22年9月の輸出量、中国向けの減少から前年同月比減

欧州委員会によると、2022年9月のEU域外への豚肉輸出量（EU27カ国）は、24万7050トン（前年同月比5.7%減）と前年同月をやや下回った（表2）。主要輸出先別に見ると、中国向け（同6.2%減）、英国向け（同11.3%減）および韓国向け（同24.3%減）が前年同月を下回った。これら3カ国でEU域外豚肉輸出量の半数を占めており、輸出量減少の要因となっている。また、中国向け輸出量の減少は今後も継続すると見込まれている。一方で、アフリカ豚熱により国内生産量が減少しているフィリピン向けの輸出量（同52.9%増）は大幅に増加している。フィリピン政府は、消費者への適正な価格での豚肉の供給を確保するために輸入税率の引き下げを23年末まで延長するとしており、同国向け輸出の伸びが期待されている。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移（EU域外向け）

（単位：千トン）

	2021年 9月	22年 9月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)
中国	90	84	▲ 6.2%	601	▲ 59.6%
日本	30	30	3.1%	292	37.3%
英国	31	28	▲ 11.3%	229	▲ 6.1%
フィリピン	12	19	52.9%	181	50.1%
韓国	19	14	▲ 24.3%	199	36.8%
豪州	9	10	9.1%	97	44.1%
ベトナム	3	6	60.2%	32	▲ 44.9%
その他	68	56	▲ 17.1%	541	7.7%
合計	262	247	▲ 5.7%	2,171	▲ 23.5%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコードは0203。

（調査情報部 渡辺 淳一）

中国

需要期を迎えるも、下落に転じる豚肉価格

繁殖雌豚頭数、5月以降は増頭傾向

中国農業農村部によると、2022年10月末時点の繁殖雌豚頭数は前年同月比0.7%増、前月比0.4%増の4379万頭となった（図1）。同頭数は22年5月以降、増加傾向で推移し、アフリカ豚熱による減少から回復した昨年水準に近付いている。なお、同部が最適な繁殖雌豚頭数としている約4100万頭と比較すると、現在の規模は6.8%上回っている状況にある。

豚と畜頭数は引き続き前年を下回る

中国国内の豚と畜頭数は、2022年5月以降おおむね減少傾向で推移している（図2）。22年10月の同頭数は2097万頭（前年同月比30.6%減）と前月並みであった。しかし、前年同月比で見ると、アフリカ豚熱の影響からの立ち直りによりと畜頭数が多かった前年の7割程度にまで減少した。

豚肉価格は上昇傾向も11月中旬から下落に転じる

豚肉価格および子豚価格は、2022年第2四半期（4～6月）からともに上昇傾向にある（図3）。子豚価格は7月以降おおむね横ばいで推移し、11月は前月比0.9%高の1キログラム当たり46.0元（888円：1元＝19.31円^{（注）}）となった。また、豚肉価格はわずかながら上昇しており、11月は同2.4%高の同40.6元（784円）となった。ただし、子豚価格、豚肉価格は11月中旬以降、ともに下落に転じている。この動きに対して

図1 豚飼養頭数の推移

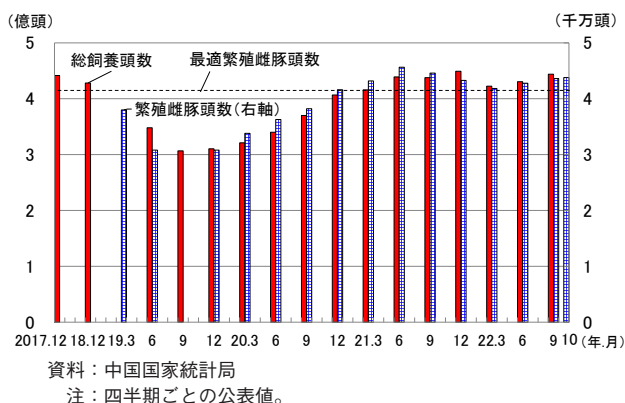


図2 豚と畜頭数の推移

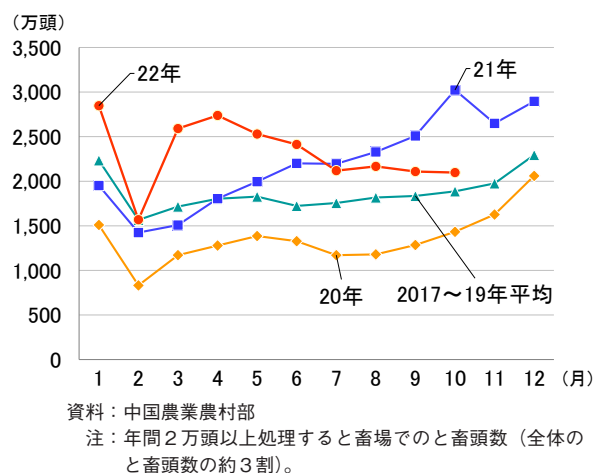
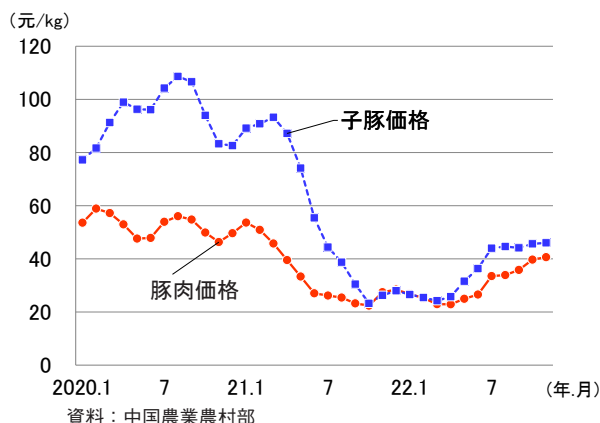


図3 豚肉および子豚価格の推移



現地では、供給面では中国政府による豚肉国家備蓄の市場放出の効果や大規模生産者からの円滑な出荷が行われる一方、需要面ではCOVID-19の影響により消費が後退しているためとされている。また、価格上昇を期待し、出荷を遅らせていた中小規模の生産者が、価格下落を見越して出荷を加速させていることも一因とする意見も出ている。

国家発展改革委員会などは、9月から合計7回にわたり豚肉の備蓄放出を実施し、11月4日の実施が最後となっている。12月以降、生体豚価格の急激な低下が見られることから、同委員会などは今後の価格動向によっては備蓄再開も視野に入れ始めているとしている。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

22年1～11月の豚肉輸入量は引き続き大幅減も8月以降は増加基調

2022年1～11月の豚肉輸入量は、154万4338トン（前年同期比54.7%減）と大幅に減少した（表）。アフリカ豚熱の影響から回復途上にあった昨年上半期ほどの輸入需要はないものの、8月以降の輸入量は増加基調にある。11月単月の輸入量は、前月比15.9%増の17万9175トンと22年の月間輸入量としては最大となった。同国では12月以降、COVID-19関連の規制緩和が進み、感染者が急増する中で豚肉価格が下落に転じている状況にあり、今後の輸入量の動向が注目される。

表 主要輸入先別豚肉輸入量の推移

(単位：万トン)

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1～11月)	前年同期比 (増減率)
スペイン	22.0	38.2	93.4	109.8	41.5	▲ 60.4%
ブラジル	15.0	22.2	48.1	54.6	37.7	▲ 26.1%
デンマーク	7.2	16.4	36.0	35.2	16.7	▲ 49.7%
米国	8.6	24.5	69.6	39.8	11.2	▲ 71.0%
オランダ	8.5	16.0	26.5	27.7	10.4	▲ 60.9%
カナダ	16.0	17.2	41.1	23.6	9.7	▲ 57.8%
その他	42.0	64.9	115.8	66.8	27.2	▲ 57.3%
合計	119.3	199.4	430.4	357.4	154.4	▲ 54.7%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは0203。

(調査情報部 海老沼 一出)

鶏 肉

タ イ

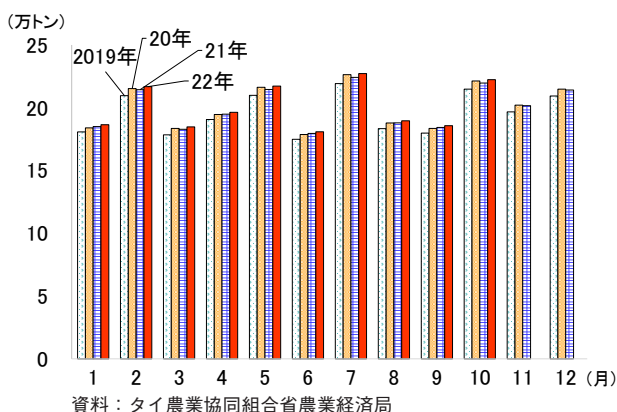
鶏肉価格は高値持続も下落傾向

22年1～10月の鶏肉生産量は、前年比微増

タイ農業協同組合省農業経済局によると、2022年1～10月の鶏肉生産量は200万7402トン(前年同期比1.0%増)となった(図1)。昨年末に発生したアフリカ豚熱発生の影響^(注1)による鶏肉への代替需要や、コロナ禍からの脱却に伴う消費回復などにより前年をわずかに上回った。また、同国内では、COVID-19に起因した労働者不足も解消したことで、鶏肉生産体制は復旧したとされており、来年の鶏肉供給量は十分に確保されるものと見込まれている。

(注1) 海外情報「2022年の豚総出荷頭数、アフリカ豚熱などの影響で減少見込み(タイ)」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003182.html)を参照されたい。

図1 鶏肉生産量の推移

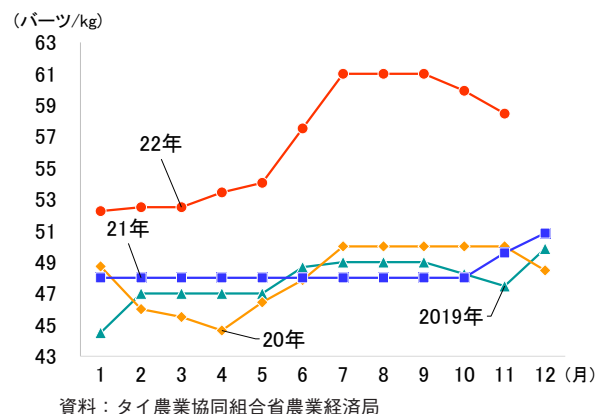


22年の国内の鶏肉卸売価格は下落に転じる

2022年11月の鶏肉卸売価格は、1キログラム当たり58.5バーツ(227円: 1バーツ=3.88円^(注2))となり、依然として高値で推移しているものの、10月以降は下落している(図2)。タイでは、アフリカ豚熱の影響が残る豚肉生産量の減少に起因した鶏肉代替需要や、コロナ禍からの経済回復による世界的な鶏肉需要の増加など、国内外で高まる需要に応えるため、大手養鶏・鶏肉生産企業は増産に取り組んできた。現地関係者からは、10月以降の価格が下落基調の中でも生産調整の動きが見られず、飼料価格高騰などにより生産コストが膨らむ中で、高水準にある鶏肉価格の急落を危惧する意見も出てきている。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

図2 鶏肉卸売価格の推移



22年1～10月の冷凍鶏肉輸出量は引き続き減少が続くも10月単月では増加

2022年1～10月の冷凍鶏肉の輸出量は、28万5228トン（前年同期比9.1%減）と前年をかなりの程度下回ったものの、10月単月では3万2015トン（前年同月比10.0%増）

と前年をかなりの程度上回っている（表1）。主要輸出先別に見ると、日本や中国向けが大幅に前年を下回っている。現状、為替の影響などによる主要輸出先の購買力や倉庫の受け入れ余力の低下などが輸出を抑制する要因となっており、また、年末需要の一服などから、輸出需要のさらなる低下も見込まれる状況にある。

表1 輸出先別冷凍鶏肉輸出量の推移

（単位：万トン）

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
日本	13.7	12.2	12.8	16.7	11.2	▲ 22.2%
マレーシア	3.2	4.1	4.1	4.7	5.7	54.8%
中国	2.1	7.6	11.5	10.4	6.9	▲ 20.5%
香港	0.5	0.5	0.9	1.0	0.9	18.9%
韓国	0.6	1.1	0.8	1.3	1.1	▲ 5.6%
その他	6.4	4.8	3.3	3.2	2.7	0.5%
合計	26.5	30.3	33.3	37.3	28.5	▲ 9.1%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは020714。

22年1～10月の鶏肉調製品輸出量は引き続き大幅に増加

2022年1～10月の鶏肉調製品輸出量は、55万4848トン（前年同期比24.2%増）と前年を大幅に上回った（表2）。現地関係者

によると、現在、主要輸出先である日本向けは来春に向けた新商品開発が進み、また、為替の影響を受ける中で、加熱済み調製品よりも比較的安価な味付け済み鶏肉などの未加熱調製品の需要が高いとされている。

表2 輸出先別鶏肉調製品輸出量の推移

（単位：万トン）

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
日本	28.1	29.5	29.2	28.8	26.6	12.6%
英国	15.8	16.5	14.2	13.6	14.4	31.6%
オランダ	3.4	3.6	2.8	3.9	4.9	59.5%
韓国	2.5	3.0	2.4	2.1	2.7	59.4%
その他	5.1	6.4	6.1	6.7	6.8	28.3%
合計	56.0	59.0	54.6	55.0	55.5	24.2%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは160232。

（調査情報部 海老沼 一出）

牛乳・乳製品

E U

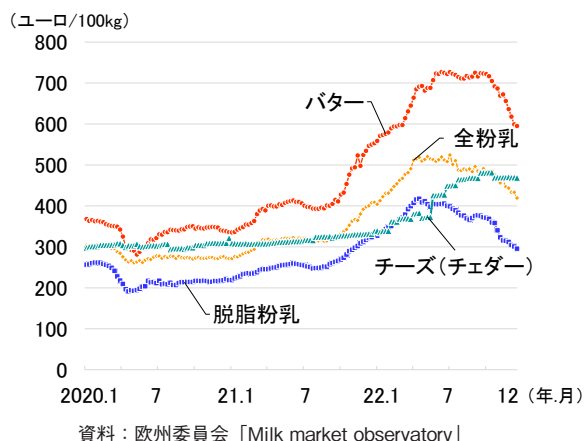
生乳取引価格の記録的高騰は続くものの、伸び率鈍化

バターの価格下落が顕著

欧州委員会によると、直近の2022年12月18日の週の乳製品価格（EU27カ国の平均）は、バターが100キログラム当たり595ユーロ（8万5067円：1ユーロ＝142.97円^{（注）}）、脱脂粉乳が296ユーロ（4万2319円）、全粉乳が419ユーロ（5万9904円）となり、いずれも下落傾向が続いている（図1）。特にバターは、高水準の価格にあるものの、同年10月以降は急速に下落している。現地情報によると、主要輸出先である中国の全粉乳需要が減退したことで、生乳が脱脂粉乳およびバターに仕向けられ、これらの生産量の増加が価格の下落につながったとしている。一方で、チーズは安定した需要により、価格は高水準を維持している。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

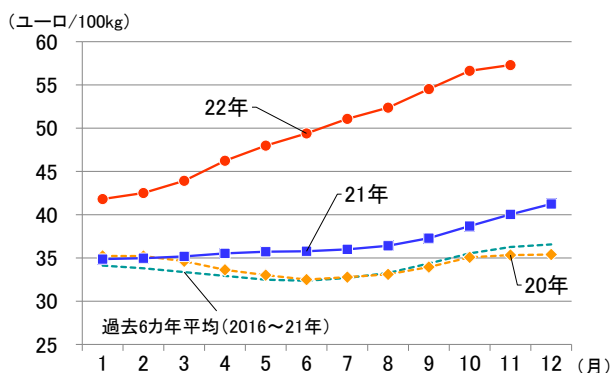
図1 乳製品価格の推移



生乳取引価格は依然過去最高値を更新

欧州委員会によると、2022年11月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり57.30ユーロ（8192円、前年同月比43.1%高）と依然として最高値を更新し続けている（図2）。しかし、バターや脱脂粉乳などの乳製品価格が下落していることから、前月比では1.2%高となり、9月および10月の同4.0%前後の伸び率から鈍化している。

図2 生乳取引価格の推移



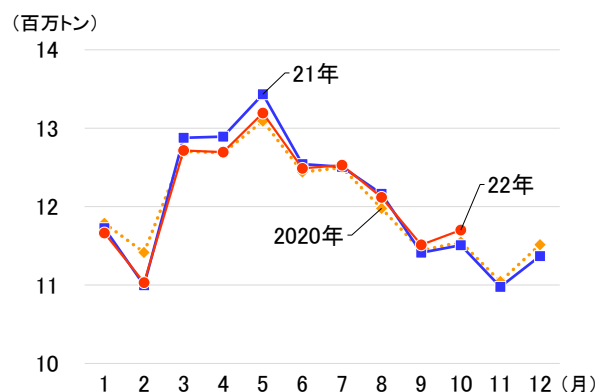
乳価の高騰と好天により生乳の生産量は増加

欧州委員会によると、2022年10月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1170万840トンとなった（図3、表）。主要生産国で乳用牛飼養頭数が減少している中で、前年同月比

1.7%増とわずかな上昇ではあるものの、21年6月以降最大の増加率となった。現地情報によると、記録的な乳価の高騰に加え、欧州の多くの地域で続いた好天により放牧環境が良好となったことで、生産者が経産牛の淘汰を遅らせたなどの一時的な要因が大きいとしている。

同月の出荷量を国別に見ると、主要国上位のドイツ（同2.3%増）、フランス（同1.3%増）、オランダ（同4.8%増）、ポーランド（同2.5%増）、アイルランド（同7.5%増）がいずれも増加した。

図3 生乳出荷量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：直近月は速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

表 主要生産国別生乳出荷量の推移

(単位：千トン)

	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)
ドイツ	2,551	2,611	2.3%	26,743	▲ 0.6%
フランス	1,913	1,938	1.3%	20,125	▲ 1.0%
オランダ	1,088	1,140	4.8%	11,480	0.5%
ポーランド	1,004	1,030	2.5%	10,738	2.1%
イタリア	1,041	1,025	▲ 1.5%	10,751	▲ 1.7%
アイルランド	669	719	7.5%	8,303	0.4%
スペイン	610	586	▲ 3.8%	6,134	▲ 2.1%
デンマーク	463	461	▲ 0.5%	4,726	▲ 0.1%
ベルギー	349	374	7.2%	3,753	2.0%
その他	1,821	1,818	▲ 0.2%	18,894	▲ 0.6%
合計	11,508	11,701	1.7%	121,646	▲ 0.3%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

(調査情報部 上村 照子)

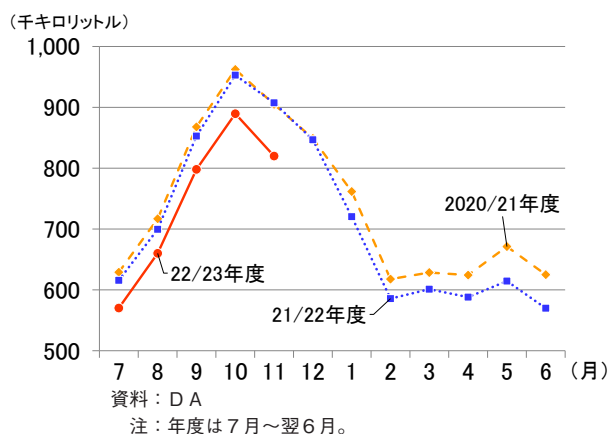
生乳生産量の前年割れ続く

生乳生産量の減少止まらず

デーリー・オーストラリア (DA) によると、2022年11月の生乳生産量は81万9855キロリットル（84万4451トン相当、前年同月比9.7%減）と、12カ月連続で前年同月を下回った（図1）。ラニーニャ現象に伴う最近の長雨や洪水が要因とみられ、豪州の主要酪農地帯であるビクトリア州やタスマニア州で降水量が多かったことが、9%を超える生乳生産量の減少につながったとみられる。なお、前年同月を9%以上下回ったのは、干ばつで乳用牛の淘汰が進んだ18/19年度（7月～翌6月）の4月以来、約3年半ぶりとなる。

また、豪州の生乳生産の最盛期である9～11月の月間生乳生産量が一度も90万キロリットルを超えなかったのは、過去10年間で初めてのことであり、22/23年度の年度生乳生産量に及ぼす影響が懸念される。なお、現時点での年度累計生乳生産量（22年7～11月計）は、373万7794キロリットル（384万9928トン相当）と前年同期を7.2%下回って推移している。

図1 生乳生産量の推移



これらの状況からDAは、22/23年度の生乳生産量について、22年9月時点では、「横ばい」と昨年度（約855万キロリットル<881万トン相当>）と同程度の水準と予測していたものを、同年12月には、昨年度を下回ることにはほぼ間違いないと下方修正した。この要因としては、近年の同国の酪農業界で課題となっている労働力不足や廃業（肉用牛農家への転換含む）に加え、最近の多雨および洪水被害を挙げている（注）。

（注）海外情報「2022/23年度の生乳生産量は減少の見込み（豪州）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003418.html）を参照されたい。

脱脂粉乳および全粉乳は好調

DAが発表した2022年10月の主要乳製品4品目の輸出量は、品目別に大きく異なる動きを見せた（表、図2）。

脱脂粉乳および全粉乳は、中東やアジア向けの輸出増加を受けて、それぞれ1万1476トン（前年同月比47.7%増）、6263トン（同56.0%増）といずれも1.5倍程度の大幅な増加を見せた。

一方、バターおよびバターオイルは、フィリピンやシンガポールなどのアジア向け輸出の不振から754トン（同57.2%減）と半減した。チーズも、中国向けの輸出減少が響いて1万966トン（同14.0%減）とかなり大きく減少した。

表 乳製品輸出量の推移

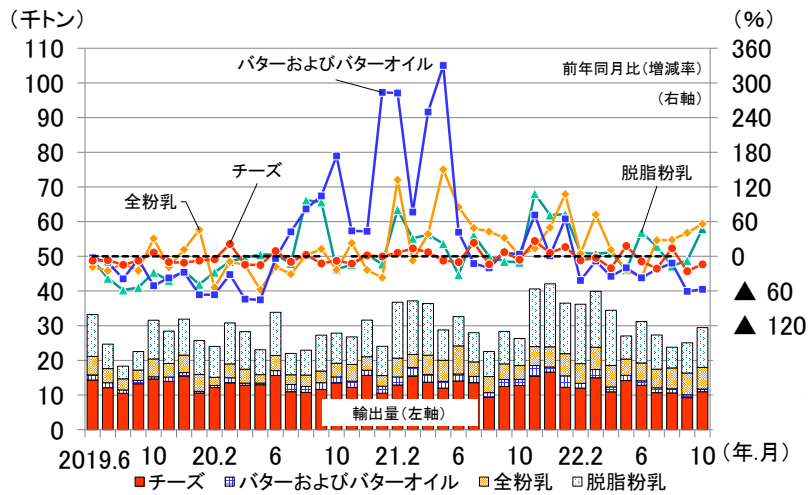
(単位：トン)

品目	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	22/23年度 (7～10月)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	7,770	11,476	47.7 %	35,992	10.0 %
全粉乳	4,016	6,263	56.0 %	23,916	37.8 %
バターおよびバターオイル	1,763	754	▲ 57.2 %	4,169	▲ 40.3 %
チーズ	12,747	10,966	▲ 14.0 %	41,526	▲ 13.6 %

資料：DA

注：製品重量ベース。

図2 乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：DA

注：製品重量ベース。

(調査情報部 阿南 小有里)

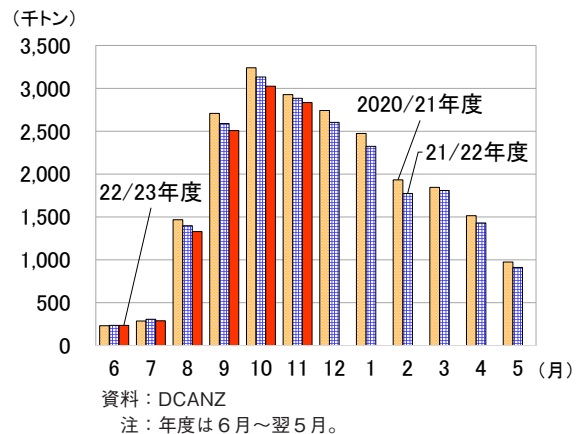
N Z

生乳生産量は前年割れが続くも、乳製品輸出額は過去最高の見込み

22年11月の生乳生産量、前年同月割れも回復の兆し

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年11月の生乳生産量は283万3700トン（前年同月比1.7%減）とわずかに減少し、5カ月連続で前年同月を下回った（図1）。ニュージーランド証券取引所（NZX）によると、11月単月としては、直近10年間で過去最低水準にあるものの、春

図1 生乳生産量の推移



資料：DCANZ

注：年度は6月～翌5月。

季終盤に当たる22年10月下旬から11月にかけて天候が改善し、牧草の生育状況も回復したことで、減少幅は縮小したとしている。

NZ国立水・大気研究所（NIWA）の今後の天候予測によると、夏季（12月～翌2月）の気温は、酪農主産地の大部分で「平年並み」または「平年以上」と見込まれている。また、NZXは、春季終盤に続いた好天を受けて、12月末時点の牧草の生育状況が前年同時期と比べ良好であることから、今後の生乳生産は回復に向かう兆しが見え始めているとしている。

22/23年度の乳製品輸出額、過去最高の見込み

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年11月の乳製品輸出量は、全粉乳を除く主要3品目が前年同月を上回った（表、図2）。特に脱脂粉乳は、主要輸出

先であるインドネシアやフィリピンなどの東南アジア向けが大幅に増加したことで、全体でも大幅に増加した。また、バターおよびバターオイルは、最大の輸出先である中国向けをはじめ、豪州および日本向けがそれぞれ増加したことで全体でも大幅に増加し、22年2月から10カ月連続で前年同月を上回った。

第一次産業省（MPI）の12月1日の公表^{（注1）}によると、22/23年度（7月～翌6月）の乳製品輸出額は、233億NZドル（2兆22億円：1NZドル＝85.93円^{（注2）}、前年比6.0%増）と見込まれ、米ドル高で推移する為替相場や豪州などの主要輸出地域の供給減を背景に過去最高を記録するとしている。

（注1） Situation and Outlook for Primary Industries
December 2022

（注2） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

表 乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

品目	2021年 11月	22年 11月	前年同月比 （増減率）	22/23年度 （7～11月）	前年同期比 （増減率）
脱脂粉乳	37,067	52,424	41.4 %	145,812	21.3 %
全粉乳	204,003	151,907	▲25.5 %	547,760	0.0 %
バターおよびバターオイル	32,865	41,692	26.9 %	183,525	45.0 %
チーズ	29,630	34,733	17.2 %	139,793	9.0 %

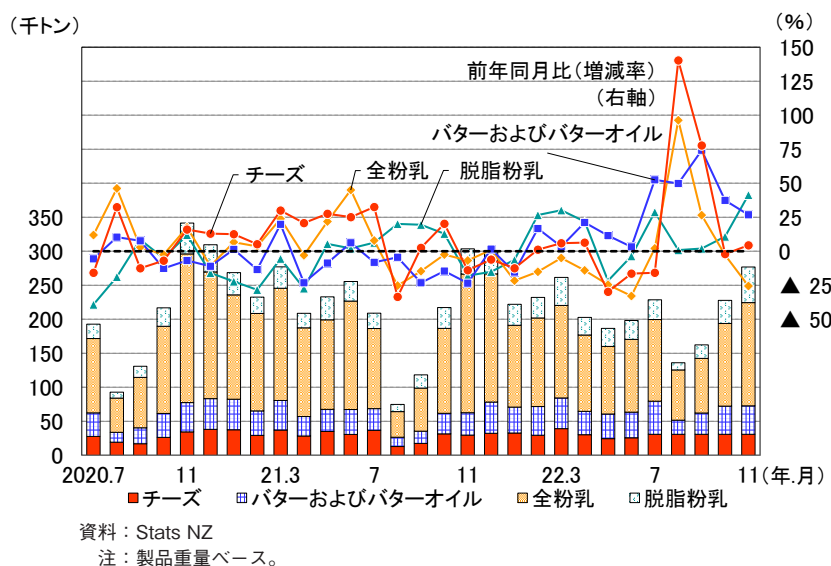
資料：Stats NZ

注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。

注2：製品重量ベース。

注3：年度は7月～翌6月。

図2 乳製品輸出货量および前年同月比（増減率）の推移



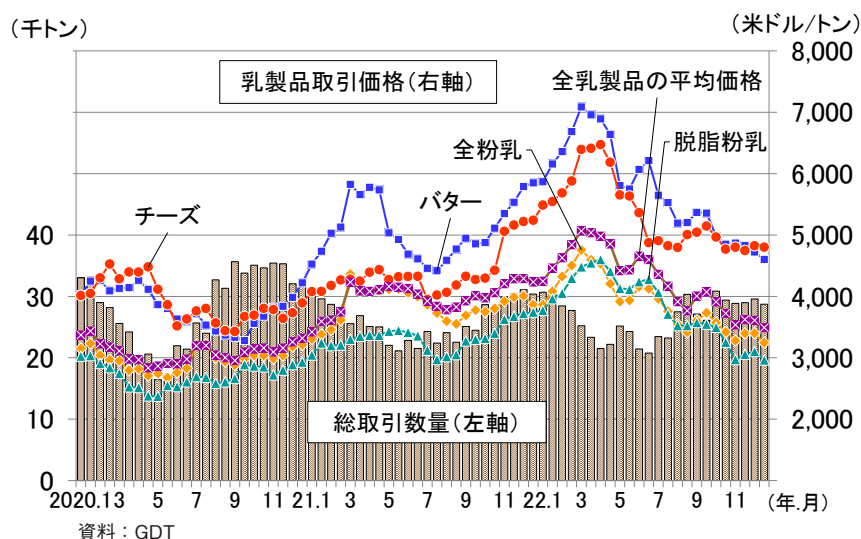
GDT価格、主要4品目すべてで下落

2022年12月20日に開催されたGDT^(注3)の1トン当たりの平均取引価格は、市場アナリストらの当初予測に反し、主要4品目すべてにおいて前回開催（12月6日）を下回った（図3）。全乳製品の平均価格は、ウクライナ情勢の悪化や中国での乳製品需要の低迷などから22年3月以降は下落傾向で推移し

ていた。しかし、直近では2回連続で上昇したため、市場は底を打ったという見方も出ていたが、下げ圧力が予想以上に強いことを示す結果となった。市場アナリストらは今回の結果を受けて、GDT価格は、今後数カ月間横ばいが続くの見込んでいる。

（注3）グローバルデイリートレード。月2回開催される電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



（調査情報部 工藤 理帆）

飼料穀物

世界

世界の期末在庫が5カ月連続下方修正され、3億トンを下回る見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年12月9日、22/23年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は11億6186万トン（前年度比4.5%減）と前月から653万トン下方修正され、前年度をやや下回ると見込まれている。地域別に見ると、ウクライナやロシア、EUなどの生産量が前月から下方修正された。特に、ウクライナでは、ロシアによる侵攻や大雨の影響を受けて主要産地で収穫作業が遅れている。その結果、収穫面積および収量がともに減少し、前月から450万トン下方修正されて2700万トン（同35.9%減）と前年から大幅に減産すると予測されている。

輸入量は、世界全体で1億7642万トン（同4.1%減）と前月から118万トン下方修正され、前年度からやや減少すると予測されている。地域別に見ると、米国からの輸出量が減少するカナダやメキシコ、フィリピンで前月から下方修正された。一方で、干ばつにより

作柄の見通しが悪く世界最大の輸入先になると予測されるEUは前月から150万トン上方修正され、2150万トン（同8.7%増）とかなりの程度増加すると見込まれている。

消費量は、世界全体で11億7055万トン（同2.6%減）と前月から475万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。地域別に見ると、EUなどで前月から上方修正されたものの、ウクライナなどで下方修正されたことが影響した。なお、最大の消費国である中国は2億9500万トンと前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億8163万トン（同10.3%減）と前月から111万トン下方修正され、前年度からかなりの程度減少が見込まれている。地域別に見ると、ウクライナなどで前月から上方修正されたものの、減産の影響を受けたEUやロシアの他、米国などは前月から下方修正された。

この結果、期末在庫は3億トン割れとなる2億9840万トン（同2.8%減）と前月から236万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。

表 主要国のトウモロコシの需給見通し（2022年12月9日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	21/22年度	22/23年度			
		（推計値）	（11月予測）	（12月予測）	前年度比 （増減量）	前年度比 （増減率）
米国						
期首在庫	48.76	31.36	34.98	34.98	3.6	11.5%
生産量	358.45	382.89	353.84	353.84	▲ 29.1	▲ 7.6%
輸入量	0.62	0.62	1.27	1.27	0.7	2.0倍
消費量	306.69	317.12	305.45	305.45	▲ 11.7	▲ 3.7%
輸出量	69.78	62.78	54.61	52.71	▲ 10.1	▲ 16.0%
期末在庫	31.36	34.98	30.02	31.93	▲ 3.1	▲ 8.7%
アルゼンチン						
期首在庫	3.62	1.18	1.49	1.49	0.3	26.3%
生産量	52.00	51.50	55.00	55.00	3.5	6.8%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.01	0.0	0.0%
消費量	13.50	14.70	14.00	14.00	▲ 0.7	▲ 4.8%
輸出量	40.94	36.50	41.00	41.00	4.5	12.3%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	1.49	0.0	0.0%
ブラジル						
期首在庫	5.33	4.15	4.95	4.95	0.8	19.3%
生産量	87.00	116.00	126.00	126.00	10.0	8.6%
輸入量	2.85	2.30	1.30	1.30	▲ 1.0	▲ 43.5%
消費量	70.00	73.00	77.00	77.00	4.0	5.5%
輸出量	21.02	44.50	47.00	47.00	2.5	5.6%
期末在庫	4.15	4.95	8.25	8.25	3.3	66.7%
ウクライナ						
期首在庫	1.48	0.83	4.57	5.09	4.3	6.1倍
生産量	30.30	42.13	31.50	27.00	▲ 15.1	▲ 35.9%
輸入量	0.02	0.02	0.00	0.00	0.0	-
消費量	7.10	10.90	10.70	7.70	▲ 3.2	▲ 29.4%
輸出量	23.86	26.98	15.50	17.50	▲ 9.5	▲ 35.1%
期末在庫	0.83	5.09	9.87	6.89	1.8	1.4倍
EU						
期首在庫	7.38	7.88	9.96	9.94	2.1	26.1%
生産量	67.44	70.98	54.80	54.20	▲ 16.8	▲ 23.6%
輸入量	14.49	19.78	20.00	21.50	1.7	8.7%
消費量	77.70	82.70	74.70	76.10	▲ 6.6	▲ 8.0%
輸出量	3.74	6.00	2.70	2.20	▲ 3.8	▲ 63.3%
期末在庫	7.88	9.94	7.36	7.34	▲ 2.6	▲ 26.2%
中国						
期首在庫	200.53	205.70	209.14	209.14	3.4	1.7%
生産量	260.67	272.55	274.00	274.00	1.4	0.5%
輸入量	29.51	21.88	18.00	18.00	▲ 3.9	▲ 17.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	295.00	4.0	1.4%
輸出量	0.00	0.00	0.02	0.02	0.0	-
期末在庫	205.70	209.14	206.12	206.12	▲ 3.0	▲ 1.4%
世界計						
期首在庫	307.41	292.54	307.68	307.09	14.6	5.0%
生産量	1,129.20	1,216.87	1,168.39	1,161.86	▲ 55.0	▲ 4.5%
輸入量	184.94	183.90	177.60	176.42	▲ 7.5	▲ 4.1%
消費量	1,144.08	1,202.31	1,175.30	1,170.55	▲ 31.8	▲ 2.6%
輸出量	182.70	202.51	182.74	181.63	▲ 20.9	▲ 10.3%
期末在庫	292.54	307.09	300.76	298.40	▲ 8.7	▲ 2.8%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/ウクライナ、EU、中国：10月～翌9月/ アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

（調査情報部 針ヶ谷 敦子）

生産量などは据え置かれ、 世界期末在庫は引き続き1億トン台を維持

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年12月9日、22/23年度の世界の大豆需給予測値を更新した(表)。

これによると、世界の生産量は3億9117万トン（前年度比10.0%増）と前月から64万トン上方修正された。このうち、最大の生産国であるブラジル、これに続く米国など主

表 主要国の大豆需給見通し（2022年12月9日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	21/22年度	22/23年度		
		（推計値）	（11月予測）	（12月予測）	前年度比 （増減率）
米国	期首在庫	14.28	6.99	7.45	6.6%
	生産量	114.75	121.53	118.27	▲ 2.7%
	輸入量	0.54	0.43	0.41	▲ 4.7%
	消費量	58.26	59.98	61.10	1.9%
	輸出量	61.67	58.72	55.66	▲ 5.2%
	期末在庫	6.99	7.45	5.99	▲ 19.6%
ブラジル	期首在庫	20.42	29.40	23.34	▲ 19.0%
	生産量	139.50	127.00	152.00	19.7%
	輸入量	1.02	0.54	0.75	38.9%
	消費量	46.68	50.75	51.75	2.0%
	輸出量	81.65	79.14	89.50	13.1%
	期末在庫	29.40	23.81	31.24	33.2%
アルゼンチン	期首在庫	26.65	25.06	23.90	▲ 4.6%
	生産量	46.20	43.90	49.50	12.8%
	輸入量	4.82	3.84	4.80	25.0%
	消費量	40.16	38.83	39.75	2.4%
	輸出量	5.20	2.86	7.20	169.2%
	期末在庫	25.06	23.90	24.00	▲ 1.7%
中国	期首在庫	24.61	31.15	31.79	2.1%
	生産量	19.60	16.40	18.40	12.2%
	輸入量	99.74	91.57	98.00	7.0%
	消費量	93.00	87.50	96.00	9.7%
	輸出量	0.07	0.10	0.10	0.0%
	期末在庫	31.15	31.79	31.50	▲ 0.9%
世界計	期首在庫	94.73	100.03	94.67	▲ 4.4%
	生産量	368.52	355.61	390.53	10.0%
	輸入量	165.54	157.14	166.28	5.8%
	消費量	315.43	314.78	329.28	4.6%
	輸出量	164.99	153.82	169.14	10.1%
	期末在庫	100.03	95.59	102.17	7.4%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：各国の穀物年度 米国：9月～翌8月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。

注2：消費量は搾油仕向量である。

要国はいずれも前月から据え置かれた。

輸入量は、世界全体で1億6621万トン（同5.8%増）と前月から7万トン下方修正された。このうち、最大の輸入国である中国は、前月から据え置かれた。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で3億2932万トン（同4.6%増）と前月から4万トン上方修正された。このうち、最大の消費国である中国は、前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億6938万トン（同10.1%増）と前月から24万トン上方修正された。このうち、最大の輸出国であるブラジル、これに続く米国はいずれも前月から据え

置かれた。

この結果、期末在庫は1億271万トン（同7.4%増）と前月から54万トン上方修正され、引き続き1億トン台を維持している。

今回の予測について米国の穀物関係者からは、前月と同様に12月予測は、例年大きな動きが見られないとされる中で、特に目新しいものはなかったとの声が出ている。一方で生産量に関し、アルゼンチンでの干ばつによる作付けの遅れなど天候要因に伴う生産への影響が懸念されている点について、来月以降の予測値に注目が集まっている。

（調査情報部 横田 徹）

米 国

米国輸出量が下方修正され、期末在庫率は8.9%まで上昇

USDA/WAOBは2022年12月9日、22/23年度（9月～翌8月）の米国のトウモロコシ需給見通しを更新した（表）。

生産量は、139億3000万ブッシェル（3億5384万トン^{（注1）}、前年度比7.6%減）と前月から据え置かれ、前年度からかなりの程度減少すると見込まれている。

消費量は、120億2500万ブッシェル（3億545万トン、同3.7%減）と前月から据え置かれ、前年度からやや減少すると見込まれている。なお、用途別の内訳についても前月から据え置かれた。

輸出量は、20億7500万ブッシェル（5271万トン、同16.0%減）と前月から7500万ブッシェル（191万トン）下方修正され、前年度から大幅に減少すると見込まれている。米国産は、他国産に比べて価格が高く、12月初旬までの販売や出荷が低調な状況である。

この結果、期末在庫は、輸出量の減少を背

景に前月から7500万ブッシェル（191万トン）上方修正されたものの、12億5700万ブッシェル（3192万トン、同8.7%減）と、引き続き前年度をかなりの程度下回ると見込まれている。

また期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）は8.9%（同0.3ポイント減）と、前月から上方修正されたものの、依然として前年度を下回ると予測されている。

生産者平均販売価格は、1ブッシェル当たり6.70米ドル（896円。1キログラム当たり35.3円：1米ドル＝133.70円^{（注2）}）と前月から下方修正されたが、前年度からかなり大きく上昇し、高値が予測されている。

（注1）1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

（注2）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

表 米国のトウモロコシの需給見通し (2022年12月9日米国農務省公表)

区 分	一単位一	2020/21 年度	21/22 年度 (推計値)	22/23年度			
				(11月予測)	(12月予測)	参考 (換算値)	前年度比 (増減率)
作付面積	(百万エーカー)	90.7	93.3	88.6	88.6	35.9 (百万ヘクタール)	▲5.0%
収穫面積	(百万エーカー)	82.3	85.3	80.8	80.8	32.7 (百万ヘクタール)	▲5.3%
単収	(ブッシェル/エーカー)	171.4	176.7	172.3	172.3	10.8 (トン/ヘクタール)	▲2.5%
生産量	(百万ブッシェル)	14,111	15,074	13,930	13,930	353.84 (百万トン)	▲7.6%
輸入量	(百万ブッシェル)	24	24	50	50	1.27 (百万トン)	2.1倍
期首在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,235	1,377	1,377	34.97 (百万トン)	11.5%
総供給量	(百万ブッシェル)	16,055	16,333	15,357	15,357	390.08 (百万トン)	▲6.0%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,074	12,484	12,025	12,025	305.45 (百万トン)	▲3.7%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,607	5,717	5,300	5,300	134.63 (百万トン)	▲7.3%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,467	6,767	6,725	6,725	170.82 (百万トン)	▲0.6%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	5,028	5,326	5,275	5,275	133.99 (百万トン)	▲1.0%
輸出量	(百万ブッシェル)	2,747	2,471	2,150	2,075	52.71 (百万トン)	▲16.0%
総消費量	(百万ブッシェル)	14,821	14,956	14,175	14,100	358.15 (百万トン)	▲5.7%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,235	1,377	1,182	1,257	31.92 (百万トン)	▲8.7%
期末在庫率	(%)	8.3	9.2	8.3	8.9		0.3ポイント減
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	4.53	6.00	6.80	6.70	35.3 (円/kg)	11.7%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

(調査情報部 針ヶ谷 敦子)

ブラジル

22/23年度トウモロコシ、大豆生産量ともに過去最大の見込み

ブラジル国家食糧供給公社 (CONAB) は12月8日、2022/23年度第3回目となる主要穀物の生産状況等調査結果を公表した(表、図1～2)。この調査は、春植えの夏期作物(大豆、第1期作トウモロコシなど)や秋植えの冬期作物(第2期作・第3期作トウモロコシ、小麦、大麦、ライ麦など)の生産予測を毎月公表するものである。

トウモロコシ生産量は下方修正も2年連続で過去最高記録を更新する見込み

2022/23年度トウモロコシ生産量は、前回より56万9600トン少なく2回続けて下方

修正されたものの、1億2582万7700トン(前年度比11.2%増)と前年度をかなり大きく上回り、CONABが統計を取り始めて以来、最大となった21/22年度を生産量を更新すると見込まれている。

全生産量の4分の1弱を占める第1期作の生産量は、前回より92万7100トン下方修正されたものの、2722万6200トン(同8.8%増)と前年度をかなりの程度上回ると見込まれている。これは、昨年度、ラニーニャ現象の影響で深刻な降水量不足に陥り作物に大きな被害が発生した南部で生産量が大幅に回復するためである。ただし、全体の作付面積は、南東部、中西部および南部を中心と

して同2.8%減と前年度をやや下回った。

州別に見ると、主生産地である南部のリオグランデス州では作付面積の86%で播種^{はしゅ}が行われ、生産量は512万7900トン（同76.8%増）と前年度の落ち込みから大幅に回復すると見込まれている。ただし、同州では、11月初めに降霜による被害が報告されており、今回、70万2600トン下方修正された。また、全体の4分の3程度を占める第2期作の生産量は前回と変更なく、9627万1200トン（同12.1%増）と前年度をかなり大きく上回ると見込まれている。作付面積、単収とも前年度を上回り、同国のトウモロコシ全体の生産量増加につながっている。

22/23年度の需給状況を見ると、生産量が増加する中、国内消費量（同7.7%増）、輸出量（同8.4%増）とも増加する一方で、期末在庫量は971万2300トン（同35.1%増）と大幅に増加すると見込まれている。

大豆生産量は前年度比22.2%増と前年度の落ち込みから大幅に回復する見込み

2022/23年度の大豆生産量は、前回より下方修正されたものの、1億5347万7600トン（前年度比22.2%増）と前年度を大幅

に上回り、CONABが統計を取り始めて以来、最大となった20/21年度の記録を更新すると見込まれている。これは、生産者の作付意欲が強いことで作付面積が同4.6%増となることに加え、前年度に深刻な降水量不足で大きな被害を受けた南部3州および中西部のマットグロッソス州で生産量が回復するためである。

州別で見ると、最大の生産州である中西部のマットグロッソ州では播種が終了した。牧草地からの転作により作付面積が増加（同6.3%増）する一方で、一部の地域において高温或不規則な降雨による作物への影響が見られ、生産量は前年度並みになると見込まれている。また、南部のパラナ州やサンタカタリーナ州では、10月に大雨、低温の気候に見舞われたものの、生育状況はおおむね良好である。

22/23年度の需給状況を見ると、国内での加工量が前回より75万6400トン下方修正された。これは、ディーゼル油に対するバイオディーゼル油の混合比率義務を23年3月31日まで10%に維持するという政府の決定を反映したものである。

表 2022/23年度の主要穀物などの生産予測

	作付面積 (千ha)				単収 (トン/ha)				生産量 (千トン)			
	2021/22年度	22/23年度			2021/22年度	22/23年度			2021/22年度	22/23年度		
		(11月予測)	(12月予測)	前年度比(増減率)		(11月予測)	(12月予測)	前年度比(増減率)		(11月予測)	(12月予測)	前年度比(増減率)
穀物合計	74,482.7	76,827.7	76,969.2	3.3%	3.6	4.1	4.1	11.3%	271,413	313,035.5	312,199.6	15.0%
トウモロコシ	21,580.9	22,325.0	22,337.6	3.5%	5.2	5.7	5.6	7.5%	113,111.2	126,397.3	125,827.7	11.2%
第1期作	4,550.7	4,409.8	4,422.4	▲ 2.8%	5.5	6.4	6.2	11.9%	25,026.8	28,153.3	27,226.2	8.8%
第2期作	16,369.3	17,254.3	17,254.3	5.4%	5.2	5.6	5.6	6.3%	85,892.4	96,271.2	96,271.2	12.1%
第3期作	660.9	660.9	660.9	0.0%	3.3	3.0	3.5	6.3%	2,192.0	1,972.5	2,330.1	6.3%
大豆	41,492.0	43,242.3	43,407.8	4.6%	3.0	3.6	3.5	16.8%	125,549.8	153,538.2	153,477.6	22.2%

資料：CONAB

注1：2022年12月8日公表データ。

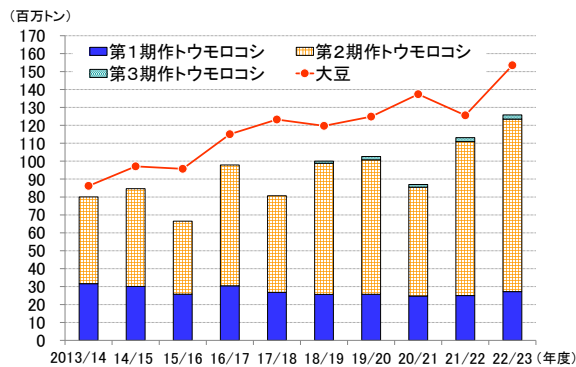
注2：第1作トウモロコシは、例年、9月ごろから南部より順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

注3：第2作トウモロコシは、主に中西部と南部パラナ州で1～3月にかけて播種が行われ、6～9月に収穫される。

注4：第3作トウモロコシは、主に北部と北東部で5～6月にかけて播種が行われ、10～11月ごろに収穫される。

注5：大豆は、10月ごろから順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

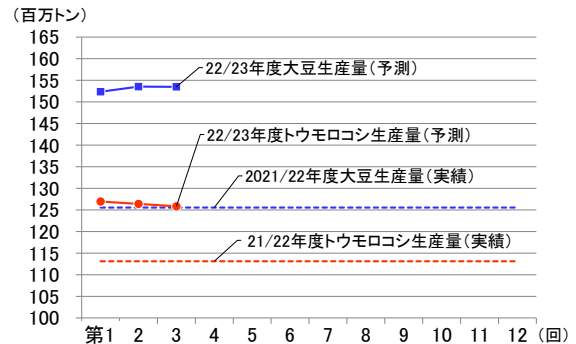
図1 トウモロコシと大豆の生産量の推移



資料：CONAB

注：2022/23年度は予測値（2022年12月8日公表データ）。

図2 2022/23年度生産予測の推移



資料：CONAB

注：生産予測の第1回は10月公表、以降毎月更新。

参考1 トウモロコシの需給動向

(単位：千トン)

年度	2019/20	20/21	21/22	22/23	増減率 (%)
期首在庫量	10,189.4	10,673.8	7,781.8	7,189.9	▲ 7.6
生産量	102,586.4	87,096.8	113,111.2	125,827.7	11.2
輸入量	1,453.4	3,090.7	2,800.0	2,500.0	▲ 10.7
供給量	114,229.2	100,861.3	123,693.0	135,517.6	9.6
消費量	68,662.5	72,263.8	75,003.1	80,805.3	7.7
輸出量	34,892.9	20,815.7	41,500.0	45,000.0	8.4
期末在庫量	10,673.8	7,781.8	7,189.9	9,712.3	35.1

資料：CONAB

注：2022年12月8日公表データ。

参考2 大豆の需給動向

(単位：千トン)

年度	2020/21	21/22	22/23	増減率 (%)
期首在庫量	4,221	8,851	3,193	▲ 63.9
生産量	139,385	125,550	153,478	22.2
輸入量	864	500	500	0.0
種子/その他	3,575	3,498	3,901	11.5
輸出量	86,110	79,224	96,586	21.9
加工量	45,934	48,985	50,679	3.5
期末在庫量	8,851	3,193	6,006	88.1

資料：CONAB

注：2022年12月8日公表データ。

(調査情報部 井田 俊二)

中国

トウモロコシおよび大豆の価格動向

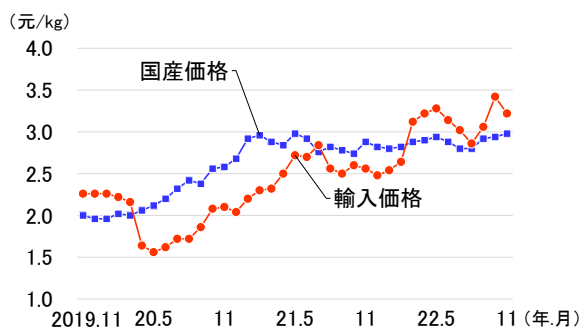
国産トウモロコシ価格、川下需要の改善から安定的に推移と予想

中国農業農村部は12月21日、「農産物需給動向分析月報（2022年11月）」を公表した。この中で、2022年11月の国産トウモロコシ価格は前月からわずかに上昇した（図1）。同月の国内のトウモロコシ需給を見ると、生産者の多くは市場価格の動きを見つつ、国内市場への供給量を増やしているが、需要

は好調とされている。これは、生体豚価格が堅調^{（注1）}なことからトウモロコシの実需者である養豚業の飼料需要が高く、供給する飼料企業の多くは収支が改善し、工場稼働率の回復からトウモロコシ需要が高まっているためであり、需給はややひっ迫傾向にあるとされている。他方で、23年の春節（23年1月22日）は例年より時期が早いため、春節前のトウモロコシ取引が集中する期間は短くなり、価格の上昇はあるものの、短期的には価格は安定して推移すると見込まれている。

（注1）2022年11月時点。

図1 トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。

注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

各地の価格動向を見ると、主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内：1%の関税+25%の追加関税）は、22年11月が1キログラム当たり3.22元（62円：1元=19.31円^{（注2）}）と前月から下落した。同年3月以降、国産価格を上回って推移していた同価格は、5月をピークに下

落し、国産と輸入の価格差は縮小したが、米国でのトウモロコシ減産予測などもある中で一転して反発していた。同月の国産トウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）同2.98元（58円）に比べて同0.24元（5円）高となり、国産と輸入との価格差は再び縮小している。

国産大豆価格、需給の緩みも若干の下落と予想

2022年11月の国産大豆価格は、前月からわずかに下落した（図2）。同月の国内の大豆需給を見ると、今期の国産大豆の生産量は前年に比べて多い中で、川下の需要は緩慢な状況にあるとされている。これは、備蓄用大豆の購入価格が一定水準に抑えられていることに加え、中国各地でのCOVID-19の拡大などに伴い、外食需要などが大きく落ち込んでいることも影響しているとみられる。このため、当面の需給は緩和傾向が続くとされているものの、大きな下落にはならず同価格は軟調に推移すると見込まれている。

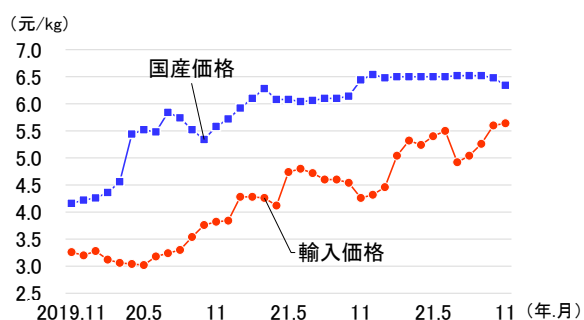
各地の価格動向を見ると、主産地である黒竜江省の食用向け国産大豆平均取引価格は、11月が1キログラム当たり5.78元（112円、前年同月比5.7%高）と高い水準で推移している。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.34元（122円、同1.6%高）と同じく高い水準にある。国産大豆と輸入大豆との価格差は、国産大豆価格が下落する一方で、大豆国際相場の上昇から縮小し、1キログラム当たり0.70元（14円）となった。

このような中で、大豆の輸入量は引き続き高い水準で推移しているが、記録的な輸入量となった前年からは減少している。22年（1～10月）の輸入量は7319万トン（前年同期比7.5%減）、輸入額は世界的な穀物相場高の影響から同14.4%増の493億4500万米ドル（6兆5974億円：1米ドル＝133.70円^{（注2）}）と報告されている。

（注2）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年12月末TTS相場。

（調査情報部 横田 徹）

図2 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国産価格は、山東省入荷価格。

注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。